



後宮名目

全

73
6297



8232

後宮名目

後宮名目

装束類

中の衣

御

とのねもの、義なり歌あともよめ

ハた、いもせの中の衣ハ此ともこ、ま

用ひてハ宿衣の義と

御をへる

御禱の事あり但禱は晝夜の己あり

あり御をへりといへる、夜の志とぬの義

なるへし

和使

おもし、いつれも御帯の類まで侍ら

お祖石の帯の類ハ表のたよて汰汰ある事

平野

去五味均平

平野

門 73
號 6297
巻



後宮名目

装束類

中の衣 御とのねもの、義なり歌あともよめ

るハた、いもせの中の衣、此とも二、二

用ひてハ宿衣の義と

御をへ里 御禱の事あり但禱は晝夜の己あり

あり御をへりといへる、夜の志とぬの義

なるへし

たはた おもし、いつれも御帯の類にて侍ら

ふ但石の帯の類ハ表のたよて沙汰ある事



去
五味均平蔵



み侍り一ハた、そのまゝなごなへ来り候
御志たも 下裳とあく 是ハ御ゆくの事にて
末をよてハおゆも、あと申侍るハ無下の
ことなり鳥家よみ侍りらうとみも對の宮を
いとひ奉りて御座賜ひらせおをしまし侍
る時ふ

波よせる松の下裳ふ万世とる水て差か
らせ友鶴の聲とつらうまつりらる此心
をえあり

伊勢の神垣 是ハ御座小望ませ給ふ時の御よ

りそひの御物ありいさ、この母よてハ掃部
寮の友人 未ねらせる事おてその大
いさ御所の御厨子棚の大いさおして中
よて納をい水侍りてうこきなくかまふ
る事おて侍るかりそめおも神垣の名を忘
れ参らせぬ事おて侍るなりその御産の比
ハ時日をえありたく侍れハ時日のよろ
しよりむ折をえおて捨ひて陰陽師の有職
の子の小封をなさしめ祈りことを物し侍
る事故實おて侍る大あ中臣の被六根清

淨の被るとよむ事おて侍ると云

幸の御守 是ハ嫁娶の夜妻方より夫の家も
て参らせ給ふ御守おて雌雄と云ふおて札
かけ侍るなりたのこしらへやうハ長さ貳
尺二け六寸おしてかけ紐ハ蹠結ひおして
多ハ菊の結ひおたを用ふる事交實ありた
の守の織物ハ錦の白地を用ふる事なり紋
ハ鴛鴦或ハ松竹鶴亀のたこひを用ひ侍る
なり夫の御守ハ母屋の中柱おけ妻の御
守ハ玉匣の菱柱おかくる事定まれること

ありおけおむる人ハ先達てまおれら妻方
の局お上臈の類の人のおく事なり

鴛鴦のをへりもの 是また禱の夜の御ました
こひあり鴛鴦ハ雌雄中むつましくたおひ
おたの貞節を守る物おて侍れお兼てえむ
そこのおたを織入て御せへり物お用ひら
る、なり是嫁娶の夜のおへりお御ものお
り嫁娶の夜ハるへて白色を用ふるなり
紅葉見 此もおち見と申事後宮の云そ事お
て侍る申せおあさましき事おかうも深き

心丸元とて昔より後宮の有識さとしたる
れ侍る有りまづ深窓なや
むをぬると申侍るハあへて人のいふ所へ
きる所ぬとも此道のありハしめて侍れハ
あるハついちの崩れをしのひ幣々ことハ
閨守のこるぬをうくらひれなる月夜のう
ちをたりかとあへて花の可ことふけのつ
いてふも心をあくるをあるものあらハ
あへていひしらぬ志とさも侍れハ守とむ
とてしと守りたきハ此道の閨守あて侍る

もろこしの人ハ夫のねなるへまありし跡
あてハ家をゆきてたふつらうまつる深
く思ふ心のあたきためしハ石とありル
ることもありこれよりて妻方の親の家
よりあぬてたのまらけの料とて嫁娶の夜
より次の夜までハ白きをへり中の衣その
下裳あへて閨のう方ハありとしある調度
のう方たひひまで白色を用ふる事ハその
をしめて参らるゝ妻のいつれたのみなり
事もなぐういの妻あて侍るハハけり事

の流れの露も三々紅葉のいろ小流る、こ
とにりおてたの夜過てつとめてハたのま
、たのまへりの物中の衣をへてもみちの
いろおたけつきたる御下裳ハもとよりか
てのこ、ま妻の家におくり考らるるなり
これ局小上蔭なとの有識あるへしさてそ
の夜過ていろのまへり中の色衣いろの御
下裳とてふれるぬあるハ挑いろの御もの
となし入なり嫁娶の夜のつとめての朝も
みちの露をみまねらるれハそのつとめて

の夜をくみためらふるなりさかいへとも
深窓ふやしるをれ對任なとめておししま
さむいむくつけくいひあらぬえらぬいた
とろくしこもたにさんこととりおて嫁娶
の夜ハたもえゆこも又ハ心をけてもたの
ハことともあちて明なむもたぬし多るるへ
これをもみちの露のそまされハつとめて
の夜も同じさま小白きいろを用ひらるる
事なり妻のための家小白き物もそちの
露の、りたるを取たあせ給ふことハ或ハ

その月小夜を申して己つらふことなると侍
りて身々となりてたまふことなれは侍
れをさやうの時ハ外のみたゞ事なきこと
己り不為るしの為めとて取おらせ給ふと
なり藤原基俊の妻ハ嫁娶の月過て八月
に子をまたれ侍るかやうのたしひたれなき
事めて侍るなり

御火とま里 是ハ夫の方にていそふことに侍
らむ妻の家にて親の祝をせたまふ事にて
侍るなりさせることなきやうふ人もたれ

えせ侍習むとゆやさし侍らむ白河院の中
宮賢子入内れをして後永暦元年七月九日
御誕生おとしけるその前御懐胎の御ルし
きとて中宮御こゝち例あらまおとしける
つとめてのむつきの中比閨白藤原師實公
参内れをしてゆくりなく御まありのたま
り水を主上かうあけさせたましける
主上おとしけさせ給たまさる御事なれハ
いあやしくともありぬて何れさせたま
しけるを辯の内侍といふ人年四そちを過

有職の存れたる内侍めてたをしけるの是
ハさ御けしきなさせ給ひたよ中宮の御火
とまりの料の殿のいも、せ給ふ子て侍ら
ふと申されぬれハ主上も御不、急ませ
給ひて面をゆきことふきハ磨うまうけと
も元お不元をとておむうつふし突をせた
まひぬをもく御火とまりと内侍の申ル
事ハ女人ハなへて経水のおこるハ、事
一月として急る事なく十四の年よりかく
の加しされとも懐胎の心をえれたをし侍れ

馬麻ハさやうの行える、事止侍るなりなへて
後宮の事ハさハ経水を火と名つけたる事
對屋ハ出て別火をりまふる事よりハおこ
りける経水たるえぬねを對屋ハいてを別
火をよまへぬを御火とまりとハ申侍る今
殿の、主上ハ水をけさせたハしけるも
御事の縁ハよらせ給へるなり火ハ水をも
て消す物あるハ水をもて火をとめていよ
く御火とまりのま在て御誕生うたあひな
き事をこめとふきお不しての事なるへし

それより後をや例となりて建武年中のも
 家木もよそのなきものうまてこのことふ
 きをなして嫁娶過てのとめてのむつき
 おはらならを妻の縁家より水いもいとて
 ねこるひ侍る事おて侍るあり

御厨子の寸法 長三尺五寸横二尺柱四本或は

或は桃りた

一の町三重 二の町二重 三の町みたなし

用桐皮除為費用葺手形為蔭袋有り

黒棚の寸法 長四尺横二尺柱四本無跣用二重

町以栲相為之

簀棚 かんさし棚を略せらわてしハんや

長二尺横一尺四方柱彫物用雲籠

用葺手形之蔭繪柱ハ伊勢梨地也

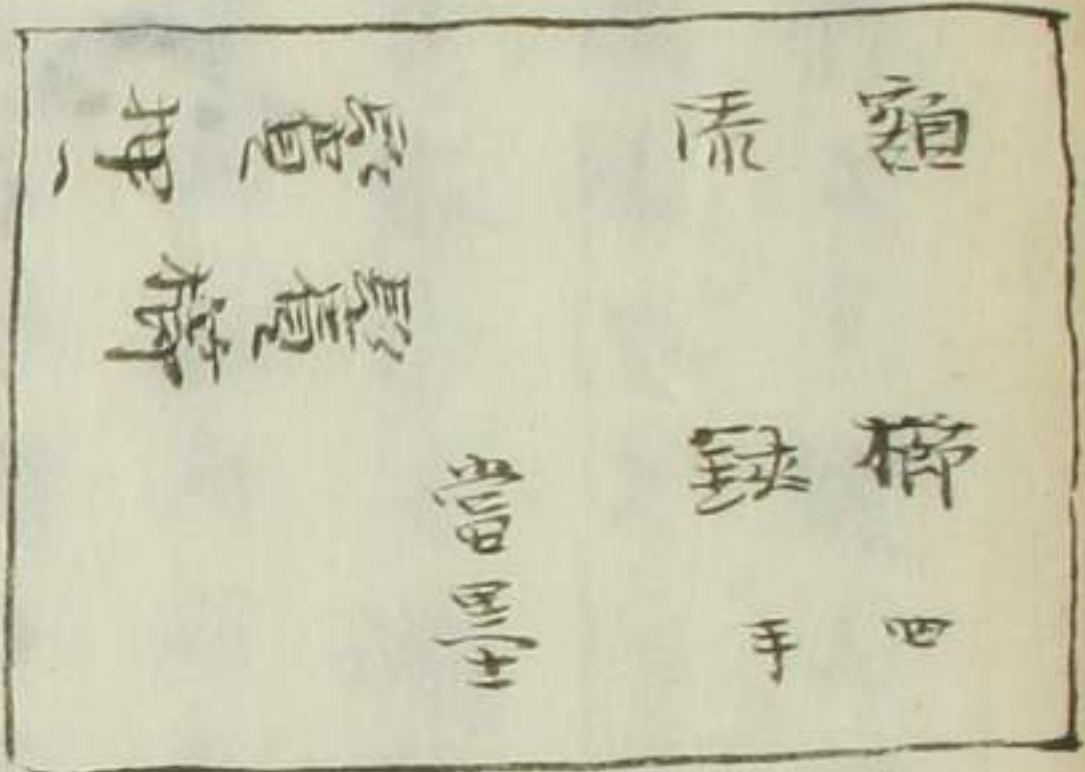
深除の眉

裳着の眉

入奥の眉

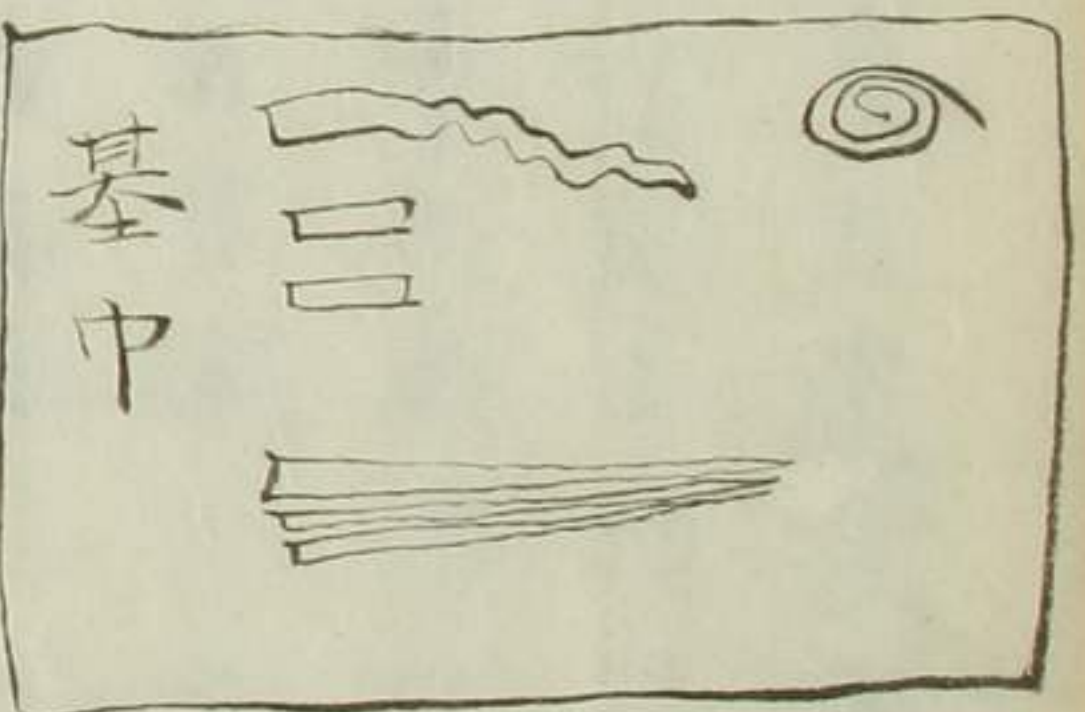


打乱の飾



御基結箱

但し
をうりせ
甲ふ

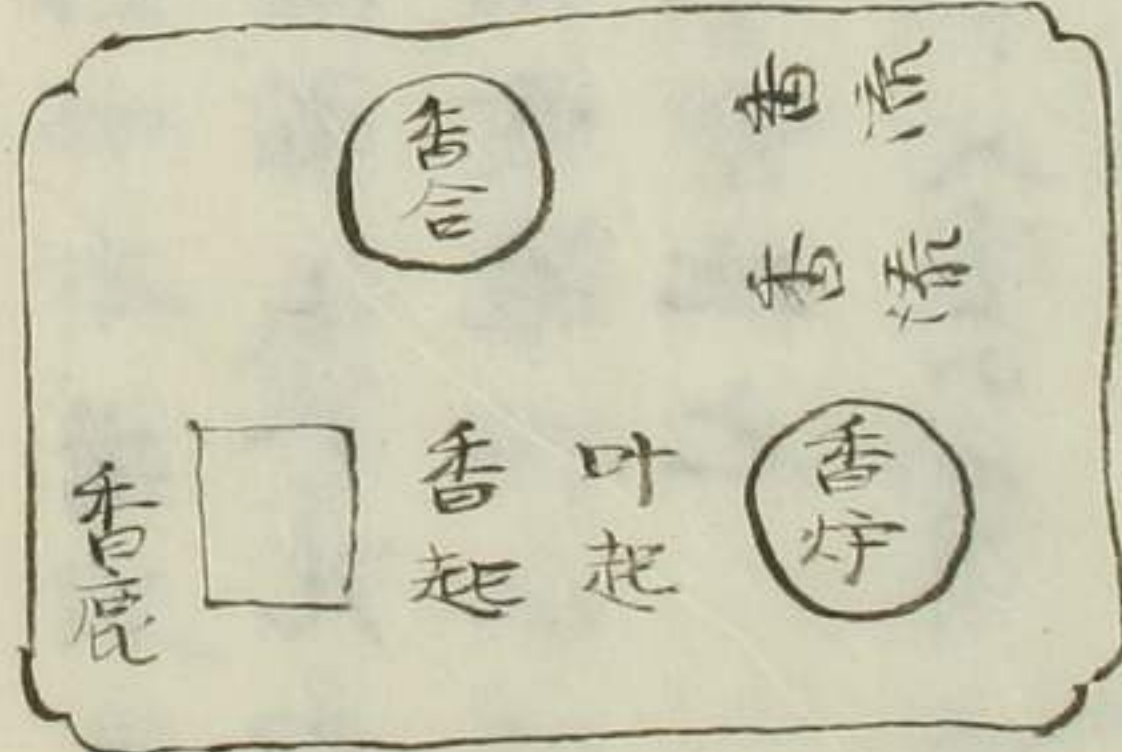


凡結一とけ
平結一とけ
毎て手
星布
本三

御鏡臺

鏡大小二面
額鏡一面

御香臺



御百步香之袍 長五寸 横一寸五分

但十六未まんハ 長四寸 横一寸

藥玉之法 麝香一兩 沉香一兩 丁香五十粒 甘松

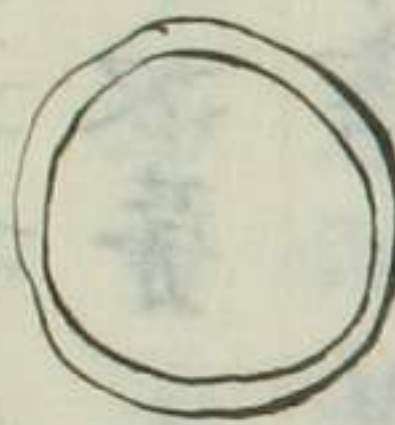
一兩 右者和氣之法

麝香 半兩 沉香 一兩 丁香 一兩 甘松 一兩 藿香 二兩

白檀 三兩 龍腦 二兩 右者丹象之法

藥玉一連十二閏月の有る年十三

由の
紅布
五分三線



一粒の大ききをよにせり

袋ハ用錦或紅練緒ハ根家公白く清華羽林ハちりきき

名家以下ハ花色を用ひ侍るあり

消息の次第

女房の奉書 是ハ表旨にて申詞にて侍るこゑ

たふてハおもとの申文とるむ申傳へ侍る

あり長橋ゆさふらふ向當内侍のらへの勅

をうけ考らせてきた、めとたを文にて侍

るあり昔ハ掌典の内侍もつゝのうまつられ

侍れとも申ころより更なさやうも侍ちそ

なりおたり

かしくととの侍る事 昔ハ消息をもちてハ啓白諷

誦文をとよもあなをしくと事侍るあり是

ハ惣て祝詞のたし昔ハとるへ侍るあり

天神宮岩戸ふかへれ給ひて岩戸より出た

をせし御時申たるハ八百万の神とちの

詞にてあなハあゝと感し念しとる詞あり

かしことハ可畏と書きたる文字にてあゝ

たえあしとくやぐしき事と中心にていそ

ひことふきたる詞あり

文箱を用ふるハ四季よりへき事

惣して女房の文おたりたとひ遠き國へたへ

る文にてもさら小日時月年をあるとをた
うあまあせて等閑な来たむる事ハ男
子と遣ひ女房ハことさらひをこならぬと
のあれをつむへき事おやけ人とろり
るへき事をもいひあらも書おくへきにお
ちりなとし侍れハ人の為子いとをしき
事おて侍る子よりあるし侍れをされとい
つらの時とハあるさをせハいハせむさ
る小より文箱をあまたとハのおきてあ
して書ハたのをりかくあるしおきて時子



ふれをりふふれふふれたる繪やうの箱に
いれておくるへき事なり
扇の尺といふ事惣して表むきふハおへて諸
臣筋を常ふたつさへ侍れハ端をもてたの
事を沙汰し侍れともこなたれてハ筋もつ
へくも侍らされをかを不り或ハ旗扇かて
寸をさたむるなりたれハいふ不といふ
へくも侍らぬハよろしく見をあらひ侍
るへきことあり

五文字の己のちの事 深窓ふやしあはる、娘

止父たつをなむ五むしとつをいまりたること
きのみ事久しく申侍らむ保元平治のころ
より大のたハ申侍るハや信西法師のむを
め辨の局の上西門院の命婦のたへたぐれ
るうたふ
人ふついつの文字のあとをきえておのけさといきと
りぬる

とよみ侍る歌信西の日記あり周礼の註
疏ハ婦人ハ借五徳以此為貞婦とありをな
えち五徳と侍るハ貞清美譜胎とて深窓ハ

ある時外男をりへり見を嫁してハニ夫を
思をを清といへるハ九の心は若うとたつ
りたをむさわちをまた身ハ近きおやのし
るへたつ人を功て夫の財祿を費さむ美と
いへるハ九のりた方をこれらうとけある
譜といへるハ先祖より系回正しき事胎ハ
嫁して相続のめてたきことゆて侍るこれ
をよして五徳とハ申侍るさ水を五徳をえ友
一たると賢し侍りて五むしとハ申侍る
母をなへて御袋といへる事

母たの人を袋おあきらへ侍ることハ聡中
これのふこられる時袋中の物のあるふこ
とくおて侍れおめてたき人ふことふきて
申侍るなりこれまた久しともいひ侍らむ

